

男ってことを分かってる？_____

浜田 清太（はまだ きよた）

いつもは優柔不断でかっこ悪い所ばかりかもしれない
それでも、好きな人くらいにはかっこいいと思われたいじゃないか

だから俺のことだけを見てほしい。

「昨日のテレビ見た？あのなんだっけ？バンドのドラムがすごいって言われてたやつ。」

「『BLACK LIGHT(ブラックライト)』のジュンジロウさん？」

今まで出てこなかった好きなバンドの話に俺は食いついた。『BLACK LIGHT(ブラックライト)』は数年前にデビューしたバンド。俺が好きなのはベースのヤマトさんなんだけど、ドラマーが上手いと有名なバンドだ。

最近はテレビにも出るようになって、ライブや動画配信サイトを通じなくても曲を聴けるようになった。

「ジュンジロウさんはこの辺出身らしくて、もう少し早く生まれてたらおんなじ高校のクラスメイトとかもありえたのかもしれないだよ。」

好きなものの豆知識は話したくなるものだ。俺はみんなに『BLACK LIGHT(ブラックライト)』に興味を持ってほしくて、早口にそう捲し立てた。

「へえ。」

そいつはあまり興味なさそうにそう言ったが、少し考えたようにクラスを見渡してにやりと笑って一人の女子生徒を指差した。

「なあ、あいつ似てない？中谷とそいつ。妹だったりして。」

みんなの視線はクラスメイトの中谷 夢（なかに ゆめ）に向いた。確かに目の感じとか似ていると言われたらそうなのかもしれない。でも、ここまで近くに親族がいるなんて考えたことがなかったので、理解が追いつかない。

「カマかけてやるよ。」とだけ言ってそいつは中谷に話しかけた。

「なあ、夢の兄ちゃんにサイン貰ってきてくれよ。何か知らないけど有名人なんだろう？」

中谷はいきなり話しかけられて驚いたようにこちらを見たが、その表情はすぐに嫌悪のものへと変わっていった。

「聞いてんのか？昨日テレビ出てたんだろ？なんだっけ、ぶらっくらいってバンドの…。」

「うるさいな。私はそんな人知らないし、もし知っててもあんたみたいなデリカシーのないやつのためにサインを貰ったりしないよ。」

それだけ言って中谷は教室を出ていった。

授業がもうすぐ始まることは分かっていたけど、中谷を追いかけることにした。わざとではないにしろ、余計なことを口にしたせいで中谷が嫌な思いをしたのは間違いない。

廊下に出るとすでになくなっており、授業に来る先生から隠れながら中谷を探すことにした。どこに行ったのか、誰もいなさそうな方へと行くと音楽室へと着いた。

中からは小さな音でビート音が聞こえる。ドアの小窓から覗くとそこには中谷がいた。黒板の前の段差の所に腰を下ろしてイヤホンで音楽を聴いている。

微かに聞こえる音で何の曲を聞いているかは見当が付いた。

中谷がふと視線をあげる。俺に気が付いたのかすごい勢いで音楽プレイヤーの音を切ってイヤホンをポケットへとつつこんだ。罪悪感を抱えているこの状態で、脅したりしないのに。

「慌てて隠してももう遅いよ。聞いているところ見ちゃったし、音も漏れてたから『BLACK LIGHT (ブラックライト)』の曲聞いているの分かったよ。」

警戒させないようにそう言うと中谷の隣に座った。

「おねがい。絶対に先生に言わないで。これお兄ちゃんからもらった命よりも大切なもののなの。」

必死にそう言う中谷に「言わないよ。」と言った。

「むしろ謝りたくて後を追ってきたのに、意地悪なんてしないよ。ごめんね、俺のせいで嫌な思いさせちゃって。」

中谷はきょとんとした。うまく伝わっていないようなので、言いづらいことだけど言葉を言い換えて伝えることにした。

「俺ね、『BLACK LIGHT (ブラックライト)』のファンなんだ。ドラムのジュンジロウさんが上手いで有名だけど、俺はベースのヤマトさんに憧れているんだ。いつもは優しいような雰囲気なのに、演奏が始まると雰囲気が変わるところがかっこよくて、好きなんだよね。」

「清太は『BLACK LIGHT (ブラックライト)』のことよく知っているんだね。」

「うん。それで、昨日テレビに出たのが嬉しくて、話しちゃったんだよね。そうしたらあいつも同じ番組見てて、ジュンジロウさんが地元おんなじなのは知ってたから、それを言ったらあいつが中谷に似てない？ って言いだしてカマかけ始めたんだ。」

「なら、あいつが悪いじゃん。清太は本当に好きなんですよ？」

「そうなんだけど、地元がとか言わなきゃよかったなって思った。まさか中谷の兄ちゃんだとは思わなかったしさ。」

「それ、もうばれてるかもしれないけど、みんなには内緒にしておいてほしい。お兄ちゃんのこととは尊敬してるから面白半分で触れてほしくないの。」

了承を示すと彼女は少しだけ安堵の表情を浮かべた。

結局その後、先生にこっそりと絞られた。理由はうまく言えなかったけど、先生は途中であきらめて授業をさぼらないようにとだけ言った。

他のクラスメイト達の興味を別の方向へと持っていくことにした。中谷のことが好きで、嫌われないから男子と女子の溝を作るようなことを言わないようにしてほしいと言った気がする。

男子たちはちゃかしてきたりしたけど、中谷にそれ以上何か言うことはなくなった。正解なのかは分からなかったけど、間違いでもなかったのだろう。その時、ひそかに片思いしていた別の女子に対しての想いはあきらめることになったけど……。

中学生になって、ベースを買ってもらった。テストの成績次第でという話だったけど、無事に学年で10位以内の成績を取ることができ、自分のベースを手に入れた時は感無量だった。

一緒に買ってもらったアンプにつなげて、ヘッドホンをつけると弾いてみる。

重音が脳に直接響いたような感覚に陥る。なんだかそれが気持ちよくて、ひたすらベースに触りまくる。その日はそれを繰り返してお母さんに寝なさいと怒られるまでそうしていた。

次の日からベースをひたすら練習する毎日になる。なかなかヤマトさんみたいに弾けるようにはならないけど、初心者とプロでは全然違うのは当たり前だった。

ヤマトさんも初めはそうだったのかな？とか思うとなんとか同じ道を進んでいるような気がして嬉しくなった。

学校ではいじられることが増えた。虐めまではいかないけど、なんか馬鹿にされてるのかなともうこともあったけど、周りの雰囲気壊すことはできなくて笑いに変える。それが俺に与えられた立ち回りだというなら、そうするしかない。

「そういえば、中谷のこと好きって言ってなかったっけ？あれどうなったの？」

小学生の時のクラスメイトが思い出したようにそう言った。しばらく話題にもならなかったその話が再燃したことに驚きつつも、今更そのことでちゃかされて中谷にまた嫌な思いをさせるのも嫌だった。なんならあれ以来話すこともなかったので余計にそう思った。

「何年前の話だよ。もうとっくに振られてるし諦めついてるよ。」

そう言えば、つまらなさそうに「ふーん。」と言われる。

話を変えないといけない。そう思って別の話題を振る。自分が別の方向でいじられるように話題を持っていく。好きとか嫌いとか別にどっちでもないけど、傷つけるようなことだけはしたくないと思った。

中学生生活はそんな感じ。勉強だけは得意だったけど、運動神経は別によくないし、好きなものはベースだけど誰にも話さない。どれだけいじられてもいいけど、本当に好きなものの領域には誰も触れさせたくないと思った。捨てたと思った自尊心の中に最後に残ったプライドはそこにあったのだろう。

結局、高校はそこそこの進学校に進んだ。同じ高校に進んだのは中谷だけだった。

高校生になったらどこかでバンド活動してみたいと思っていた。音楽が好きな友達と好きな音楽をひたすら練習して、たまにどこかで披露する。

でも、正直どこでそんな友達を見つけていいのかもわからないし、自分の実力が足りるのかもわからない。そんなことを考えてしまい、一步踏み出せずにいた。

高校でも結局すぐにいじられキャラとしてのポジションを確立してしまい、あげくの果てには女子にかわいいと言われる始末。

バンドを組んで演奏している姿を見せたらカッコいいとか言ってもらえるのかな？

そんなことを考えていると、同じクラスになっていた中谷が軽音部を作ろうと誘ってくれた。俺なんかでいいのかとも思ったけど、断る理由は何もない。俺は二つ返事で了承した。

俺が入部した時にはボーカル＆ギター担当の原山海（はらやま うみ）がいて、入部してからすぐにキーボード担当の石山晴夏が入部した。そして、最後は海が隣のクラスのイケメンの浩樹を連れてきて5人になった時点で軽音部が発足となった。

中谷のドラムの腕は想定してたよりも何倍もうまくて、海の歌はとても上手かった。石山も元々ピアノを習っていたらしく難なく曲を弾きこなす。唯一浩樹が初心者らしく、海がギターの弾き方を教えていた。

練習曲は『BLACK LIGHT（ブラックライト）』の曲ばかりで、選んでいるのは海。中谷のことを知っているのかと思ったけど、そんなことはなく『BLACK LIGHT（ブラックライト）』が好きなだけのようにだった。

中谷がドラムをうまいのは血筋なのだろうか？最初はそんなことを思ったけど、練習家なのは見ていたらすぐわかった。おそらく、練習曲として海が持ってきた曲は全部弾いたことがあるのだろう。それでも練習を欠かすことはなく、誰よりも完璧にこなせるまで練習していた。

「夢ちゃんはすごいね。あんなに上手なのに、毎日ずっと叩いててドラムにそれだけ真剣なんだって思うよね。プロになったりして。」

「うん。素直に尊敬するよ。同じ中学校だったけど、ドラムが叩けるなんて知らなかったし、誰にも言わずにずっと練習してたんじゃないかな。」

「浜田くんも上手だよ。今までずっと練習してきた人の演奏だって分かるもん。演奏しているとき真面目な顔になるから、いつもと印象変わってカッコいいよね。」

「え。あ…。ありがとう。」

本当なら石山もうまいって伝えるべきなんだろうけど、何気なく石山が言った「カッコいい」の言葉が頭の中をリフレインして離れなくて、何も言えなくなった。

相手は何も思っていないのだろうと思っても、今までカッコいいなんて言われたことがない俺からしたらキラーワードだった。この日から石山の一挙手一投足が気になって仕方がなくなった。

石山はかわいい。仕草も声もキーボードを弾いている姿も。でもこんなこと言ったら気持ち悪がられそうで自分の心の中でだけ彼女をほめた。

そんなある日、山瀬が作曲をすると言い出した。どうやら趣味で曲を作っていたことが発覚したらしく、それを自分たちの曲にして演奏しようということになった。

聞かせてもらった曲は確にかっこよくて、いい曲だった。石山が作詞に興味があるらしく、オリジナル曲をどんどん作って演奏していこうという部活の方針になった。

浩樹の作る曲には1つ特徴があった。ドラムの難易度だけずば抜けて高い。最初は躓いても中山は数日経つと完璧に仕上げてくる。ただただすごい。そう思うしかない。

浩樹はそれをあまり理解してなさそうだけど、作曲とドラマーの意地と意地のぶつかり合いを見せられているようだった。

また、石山もいい作詞をする。激しめの曲には熱い歌詞を、少しスローテンポな曲にはメロい歌詞をあてがっていく。

素直にすごいなと思いつつも、かっこ悪いとは思いながらも俺はやキモチを妬いていた。作詞と作曲という共同作業をしていると考えるとややもやる。ましてや浩樹はかっこいい。身長も高ければ鼻筋もしっかりと通ったイケメンだ。

もしかしたら二人の間に何かあるのかもしれない。何もないだろうとは思いながらも、その疑念を晴らすことはできないでいた。こんな格好悪い姿は絶対に見せたくない。

いつもはいじられ役でも、石山にだけはかっこいいと思われたい。

そんな自分の気持ちを聞いてくれるのは海だった。

石山のことが好きなことを伝えて、何気ない一言に一喜一憂していることを赤裸々に語る。どうやら海も好きな人がいるらしい。相手が誰かは教えてくれなかったけど、どこにデートに行ってみたいとか、男同士の妄想話。

みんながいなくなったタイミングに部室でよく語り合った。

そんなこんなで夏休みになった。俺たちは学祭のために夏休み返上で練習することになった。第二音楽室に集まって、みんな集まったら合わせて演奏する。

そんなある日、事件が起きた。部室に行くと海と中谷と山瀬がいて床に散らばっている紙を見ていた。いったい何なのかと思い拾い上げると、どうみても俺と海が顔を赤らめて見つめ合っている絵だった。

他の紙を見れば漫画になっているようで、いったいこれが何なのだろうか？みんな何が起きているのか分からない様子だった。

他キャラクターのイメージ

【原山海】

いつも明るくていいやつ。恋愛相談も乗ってくれるしとても頼りになると思っている。
相手が誰かまでは教えてくれないけど、好きな人がいるらしい。俺もこんなに頼りになるカッコいい男だったらいいのと思うくらいいい人だから、きつとうまくいくと思う。

【中谷夢】

お兄さんがジュンジロウさん。ドラムがめっちゃくちゃうまい。お兄さんの名前を軽率に出されることは嫌いなので、知っていても誰にも話したことはない。あっけらかんとした性格で多分ものすごく負けず嫌いだ。

【石山晴夏】

とてもかわいい。俺が片思いしている相手。どうにかしてカッコいいところを見せて告白したいと思っている相手。でも作詞作曲と一緒にしていることと同じクラスだということもあり、山瀬といい感じなのかもしれないと思っている。

【山瀬浩樹】

基本的にあんまり自分の意見を言わないタイプだけど、音楽を作るセンスがあると思う。特にドラムを難しくしがち。イケメン、高身長、硬派で浮ついた噂を聞かないぶん、石山とどうなっているのが気になる。

以前、ボトルシップに流した内容

【中谷が努力に感動したときにした投稿の内容】

最初は血筋なのかって思ったけど、努力の賜物だとしかおもえないよね。
家にジュンジロウさんがいるってどんな気分なんだろう。

【石山のことを考えているときに投稿の内容】

カッコいいって思ってもらえるようになるにはどうしたらいいのだろうか？
好きな子には男らしい所を見せたい。

【ファッション雑誌の恋愛コラムを見て書いた投稿の内容】

単純接触効果…。単純に一緒にいる時間が増えると相手を好きになる可能性が上がるらしい。
あいつのこと好きなのかな？

目標

- ・BL本を書いた犯人と破いた犯人を探す。(普通にだれが書いたのか気になる)
- ・石山に気持ちを伝える。(本当は違うということを示したい。)

※議論の最初にする事

原山海に密談を誘われたら、誰に引き留められようとも2人で密談をおこなう。(1回のみ)

ボトルシップのID

trb-kn

ひいてはいけないボトルシップの番号

3・8・18